みほとけの「すがた」

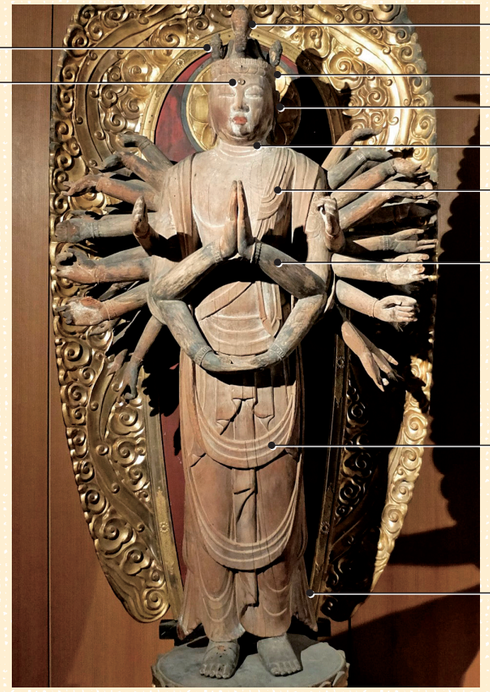
如来のすがた

如来は人々が理想とする悟りを開いた姿を現し、人々を苦悩から救う役割をもちます。阿弥陀如来、釈迦如来、薬師如来（左掌に「薬壺」をのせます。）等があり、穏やかな表情、二段に盛り上がった頭部（肉髻）やパンチパーマにような髪の毛（螺髪）、質素な衣（衲衣）をまとう姿が特徴です。如来は、手の形で「恐れなくてよい。」（施無畏印）、「願いを聞こう。」（与願印）等、様々な意思を表します。（印相）

〔阿弥陀如来坐像〕

菩薩のすがた

菩薩は、悟りを開くために修行をしている姿を現します。髪を頭上に高く結い上げ、冠を被ったり、胸飾りや腕飾り（腕釧）等で着飾ったりした姿が多く見られます。聖観音をはじめ、十一面観音、千手観音等が代表例として挙げられ、如来の脇侍として三体一組で制作されることもあります。その場合、阿弥陀如来には観音・勢至菩薩、釈迦如来には文殊・普賢菩薩というように、組み合わせが決まっています。



〔千手観音立像〕

明王のすがた

明王は、如来の教えに従わない愚かな人々に対して、如来が姿を変えた仏です。激しい怒りの表情（忿怒相）を浮かべ、剣や羂索等の様々な武器を用いて、強い力で人々を救います。明王のうち、最も有名なのは不動明王で、静岡県内の寺院でも多く見られる作例です。

〔不動明王立像〕

天部のすがた

天部は、仏教を守る存在として、インド古来の宗教であるバラモン教（後のヒンズー教）など異教の神々を仏教の世界に取り入れたものです。仏教に基づいた決まった姿がある訳ではないため、その種類も多彩です。怒った表情（忿怒相）をし、甲冑を身にまとったり、剣や戟等の武器をもったりして、仏敵に立ちはだかります。

〔持国天立像〕